

道具は言葉と、いつ鑿

作家 塩野米松

私が聞き書きという形式で最初に文章を発表したのは、法隆寺の棟梁西岡常一氏を取材した『木に学べ』だった。一九八五年四月号表示の月刊誌連載を開始した。十八回ほど連載し、単行本にまとめた。その本には西岡氏を著者と表記してある。営業的なこともあったろうが、聞き書きという表現が独立した文芸として認識されていなかったこともある。

聞き書きのような方法は民俗学や人類学、社会学などの分野で聞き取りという形で前から行われていた。文芸の分野でも児童文学者の斎藤隆介氏（一九一七—一九八五）が『職人衆昔ばなし』を一九六七年に刊行している。職人達の聞き書きをまとめたものだった。地の文のない、職人の話し言葉でまとめた優れた作品だ

が深い。私がいかに努力したところで大海の水を盃で汲むようなものになるのではという不安があった。建築用語も道具、部材、木取りのことなど使われる言葉も独特で、いちいち解説や説明を付けていては読み物としての魅力がないし、人柄がうまく表せない。

斎藤隆介氏がどんな方法で『職人衆昔ばなし』を作り上げたかお聞きしたことはなかったが、西岡氏の話す言葉だけでまとめ上げるといやり方があるのではと思った。

大和弁の味わいも含め、海をそのまま読み手に届ける。通常なら話し言葉を「」でくくって書くが、かっこをはずして全文しゃべり言葉。説明も感想も状況も描写しない。欲しい言葉や説明は、質問の仕方を工夫することで本人が言葉にしてくれるのでは。

話の全てを録音し、文字起こし、作業をしてみた。私の質問は取り払って、西岡氏の言葉だけ残しても、意味が通じ、解説や道具の説明も可能だった。会話というのと同じ土俵の上に立てば、答の言葉は質問の意味を汲み取った話として続けられている。互いの表情や声のようすから、理解度がわかり、説明が不足とわかれば補足の言葉が続く。

った。私はこれを大学生の頃に読んで、こうした方法があるのだと感心した覚えがある。

西岡氏に『木に学べ』のタイトルでお話を聞き連載を始めたいと手紙を書いた。了解の返事をもらったのだが、どういう形で作品を仕上げるか悩んでいた。それまでたくさんの人に会って、ノンフィクションの形でまとめてきたのだが、このやり方には疑問を持っていた。それまでは、仕事場や道具を見、実際の作業をやってもらい、素材の善し悪しから製品の流通、修業時代のこと、師匠のことなどを聞き、それを整理して作品に仕上げていた。

資料を読み込み、解釈や説明を付け、私の文章として仕上げてあるだけにわかりやすかったと思う。しかし、それは私の理解の範囲を超えることはない。私という小さな容器が汲み上げただけのもので、ご本人の仕事や生き方のごくわずかを拾ったにすぎないのではないか。わかりやすく伝えるというのはそういう危険を伴うことなのだ。わかるということには容量がある。書き手の大きさでしかものは見えていないのだ。

西岡氏は代々法隆寺を守ってきた棟梁家の一統で、積み重ねた経験、知恵は豊かで、技や木の癖の話は奥に答えてもらうというよりは、おしゃべりに近いものだ。質問など用意したところで、建物のことも木のことも大工の生活も、私が入られる知識は俄で些細なものだ。それなら話を聞きながら疑問やよくわからぬことを訊き、教えてもらえばいい。

何も知らない故に、質問は山ほど生まれてくる。おしゃべりだから話は脇にそれ、過去にも飛ぶ。法隆寺の話となれば遠い昔もあれば、近い過去もある。飛んだ話やわきにそれた枝葉は文章化する段階で拾い集めて整理する。こうして自己流の聞き書きの方法を試した第一作が『木に学べ』だった。とても手間のかかる仕事であるが、言葉を選びまとめていく作業はおもしろく、西岡氏が直に読み手に話しているように仕上がった。

話し言葉は生きものだ。互いを目の前にして話すから説得力がある。テンポがある。余分な装飾がない。喩え話に悲しみや喜び、笑いが混じる。人のおしゃべりというものは感情豊かなものであり、知恵と経験で語られる。うなずき、笑い、質問を挟む。それが話し手を励まし、調子を作る。記憶の底に埋もれていた話